

一般言語学研究室および音声実験室の歩み

城生 佰太郎

1. 一般言語学研究室

1.1. 創設期

昭和 40 年代の中頃から、日本全国には大学紛争の嵐が吹き荒れ、東大をはじめとする大学の多くが突然の「構造改革」を余儀なくさせられたのであった。そんな中で、東京教育大学の言語学科が受けたダメージはとりわけ甚大であったように思われる。というのも、当時の河野六郎教授、関根正雄教授をはじめ、大半のスタッフが大学を辞職してしまい、昭和 49 年度から開学した筑波大学に移ったのは音声学を専門とする青柳精三助教授だけという異常事態に追い込まれてしまったからにほかならない。しかも、結局はその青柳助教授さえもが、筑波移転の直後に辞任してしまい、一般言語学のスタッフは、ここに壊滅状態へと追い込まれてしまったのであった。

当時の国語学コースの教授であった馬淵和夫博士から、あるパーティー会場で、筑波大学開学に当り「言語学概論」と「音声学概論」とを私に担当してほしいと持ち込まれたのは、ちょうどそんな時であった。若干 28 歳の私にとっては、かなり荷の重い依頼ではあったが、当時奉職していた東京学芸大学専任講師の肩書きがあったおかげで、次年度の昭和 50 年度から開設される予定であった大学院、文芸・言語研究科博士課程の授業担当を含めて、無事文部省の大学設置審議会の審査をパスすることができ、ここに初代一般言語学担当の教官として私は着任することとなった。ただし、身分は非常勤講師であった。

翌昭和 50 年度には、先にも触れたように大学院の博士課程が発足し、さらにたった一人ではあったが専任講師として、アメリカでセム語学の研究をしていた津村俊夫氏が着任した。ちなみに、この年から言語学概論は津村講師、音声学概論は城生が担当することとなり、大学院では言語学特講 A (セ

ム語学)を津村講師、言語学特講B(アルタイ語学)を城生がそれぞれ担当した。「特講」しか開講されていないという、きわめて異例な博士課程のスタートであった。

1. 2. 松本克己教授時代

1980年には城生が専任講師として着任し、83年には金沢大学からギリシア語学と言語類型論を専門とする松本克己氏が、筑波大学文芸・言語学系における一般言語学コースの初代教授として着任した。当時はその他に、現代語・現代文化学系から形態論を専門とする樋口時弘氏、やや遅れて意味論を専門とする綾部裕子氏もスタッフとして加わってきたので、総勢5名の豪華さであった。ただし、人事台帳上での一般言語学スタッフは、松本教授と津村講師の2名のみで、他のスタッフはそれぞれ別の名目で参加していたので、結局は東京教育大学時代に2講座4名であった一般言語学スタッフが、帳簿上は2名に削減されてしまったということにほかならなかった。

1990年に、当時すでに助教授に昇任していた津村氏が辞任し、後任のスタッフとしてオーストラリアで住民語の類型論的研究をしていた角田太作氏が助教授として着任した。かくて、松本教授と角田助教授による言語類型論黄金時代が幕を開けたのである。しかし、不思議なことにこの時期に学位を取得した院生は、城生の指導学生である金善姫氏による実験音声学の研究だけであった。なお、学位の授与に際しては、応用言語学コースの湯沢質幸教授をはじめとして東京外国語大学AA研の大江孝男教授などの助けを借りるなど、それなりの苦労があった。

1. 3. 角田太作教授時代

1992年に松本教授が停年退官し、1993年からは後任として東大助手でスラブ語学を専門とする三谷恵子氏が専任講師として着任して、角田助教授は2代めの教授に就任した。しかし、すぐさま「絶滅に瀕した言語」研究の重要性が取り上げられ、これの拠点が新に東大に作られたため、角田教授はわずか3年ほどの短期間で東大に転出してしまった。従って、角田教授も指導学生に誰一人として学位を授けることなく本学を去ってしまった。

1. 4. 城生 佰太郎 教授時代

1996年に角田教授が転出した後、実験音声学とアルタイ言語学を専門とする城生助教授が人事台帳上での一般言語学スタッフに配置転換されたため、特に外部から新にスタッフを補充することはしなかった。このため、名目と実体の不一致が解消されて組織上ではスッキリした形になった代わりに、一般言語学担当スタッフは城生、三谷の兩名に現・現の樋口教授を加えた3名だけになってしまった。翌1997年城生は3代めの教授に、三谷講師は1998年に助教授にそれぞれ昇任したが、樋口教授は停年で退官し、三谷助教授も1999年に京都大学へ転出したため、後任として2000年よりSEM語学を専門とする池田潤氏が専任講師として着任して今日にいたっている。この間、城生は英語学コースの中右実教授の助けを借りて、指導学生の佐々木冠氏に学位を授与した。

なお、こうした流れをご覧いただければおわかりのように、現在のスタッフは、かつての東京教育大学時代に2本柱として聳えていた河野六郎教授のアルタイ言語学と関根正雄教授のSEM語学を、曲がりなりにも守っているということになる。

2. 音声実験室

本学の音声実験室(人社棟 B613)の設計は、その根幹部分を城生が行なっている。昭和48年ごろに当時の東京教育大学助教授であった青柳精三氏から相談を持ちかけられ、音声解析ができるというコンセプトのもとに、岩通の技術者を交えてプランを練ったものである。その証拠は、実験室内にシールドルームが併設されているからで、これは現在でも高品位の録音ならびに脳波実験に役だっている。ただし、1.にも述べたように筆者はしばらくの間非常勤講師であったため、実験室建設に関わる学内事情の詳細は知らない。

筆者の知りうる限り、当初はせつかくの実験室も実験音声学の専門家がいなかったため、本来の目的で使用されることはなく、草薙裕助教授のパソコンや寺村秀夫教授、芳賀純助教授のVTRなどが所狭しと並んでいた。しかし、おいおい島岡丘教授がリアルタイム・スペクトログラムを導入したり、城生が東京教育大学末期に使われていたリオン社製サウンド・スペクトログ

ラフの埃を払って音声学の授業で使い始めたりして、筆者が専任化された 1980 年ごろからはかろうじて音声学の実験室としても機能し始めた。

やがて、林四郎教授のご尽力により、学内の文系としてはやや高額な予算を配分していただき、1983 年ごろに半デジタル型のサウンドスペクトログラフおよび、エレクトロ・パラトグラフィーと解析装置としてコンピュータを導入し、ようやく本格的な実験音声学がスタートした。1989 年ごろに、再び学内でやや高額な予算を配分していただいたおかげで、当時はそろそろ音響から生理実験へと興味の矛先が転換していた筆者は、呼気流量が計測できるフォノ・ラリノグラフィとフロー・ネイザリティグラフを導入した。これら生理実験器材は、当時としては画期的なものであり、他の大学からも注目され始め、宮城教育大学、宇都宮大学、東京女子大学、早稲田大学などから学生や研究者が訪れた。

一方、音響音声学の方も教育環境としては整備しておかなければならないことを痛感し、この頃にデジタルソナグラフ 5500 および CSL を設置した。かつては 3 分待たされていたソナ解析が、実時間でできるようになり、また極彩色のディスプレイも当時としては評判を呼んだため、学生が目白押しで授業を受けにやってきた。このため、一時期は学類の実験音声学が 26 名に達し、人数制限を余儀なくさせられたりもした。

1990 年代に入ると、筆者は脳神経科学に興味に移っていった。このため、東京医科歯科大学医学部に 4 年間通って脳波実験の手解きを受け、1995 年からは自らの手で脳波を用いた実験音声学の研究を始めるようになった。幸いなことに、当時の文部省から特別予算を配分していただいたおかげで、1996 年には本学にも脳波解析装置一式を導入することができ、今日にいたっている。

現在、脳への興味はいたるところで起こってきており、当分はこのテーマは廃れることがないことを思えば、他学の言語学コースに先んじて本学に設置された脳波実験設備は、必ずや本学の実験研究の水準を高めるのみならず、言語学・音声学全般への寄与貢献も少なからず期待できるものと確信している。なお、これを裏づけるかのようには、日本大学、文筆家、中国社会科学院、内蒙古大学、上智大学、東京外国語大学、早稲田大学大学院、桜美林大学大学院、その他からも多くの見学者が訪れている。